BHT　～隻眼の天使～

高橋Ａ全

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＢＨＴ　～隻眼の天使～

【Ｎコード】
Ｎ９６５７Ｚ

【作者名】
高橋Ａ全

【あらすじ】
家族をうしなって行き場をなくした少女は、資産家の令嬢のご厚意で、メイドとして働かせてもらえることになった。忙しくも心休まる日々が続いたが、それもつかの間のこと、大恩あるお嬢さまに危機が迫ると知らされる。なんとかしようと困惑する少女の前に、凄腕のメイドがやってきて……。
むらむらしているＢと、よたよたしているＨＴが繰り広げる、まったりとしたメイド系コメディー。

プロローグ

大好きだった、お父さんが、死んだ。

突然あらわれたのは、黒ずくめの男のひとたち。

「遺体の確認をしてもらいたい」

それが、彼らの言い分だった。その口調はきわめて事務的で、感情というものを感じさせることがなかった。だから、わたしも何も感じることはなかった。

これは夢か何かで、現実ではない、わたしはそんな風にしか感じていなかった。

彼らに連れられて霊安室へと向かう最中も、わたしはずっとふわふわとした非現実的な感覚に支配されていた。

暗い部屋。

寒い部屋。

狭い部屋。

白い布がめくられて、白い肉体があらわになる。

見慣れない顔。まるで違う顔。

お父さんはこんな顔をしていない。そう思ったから、別人だ、としか思えなかった。

そのひとのほほに、触れてみた。

ぐにゃぐにゃとした、奇妙な感触。やっぱりちがうひとだ、とわたしは感じていた。

「これなら大丈夫じゃないか」

男のひとがつぶやく。

わたしに聞こえないようにして、ひそひそと会話がかわされた後で、別の男のひとが、ささやくように言った。

「写真を見ますか？　無理に、とは言いませんが」

口調とは裏腹に、その表情と声は、強制的だったように記憶して

いる。
差し出される写真に、目を落とした。
上の方からぶら下がった縄。その縄が巻きついている首。だらりと垂れ下がった体。
わたしの視線が、遺体の顔へと固定される。突き出そうになっている眼球。実際に突き出されている舌。紫色になっている顔の皮膚。
それは、今まで見たニンゲンの顔の中で、いちばんひどいものだったけれども、わたしには分かった。わたしには分かってしまった。写真にうつる、天井からぶら下がった物体が、まさにお父さんである、と認識された瞬間、わたしの中で何かがはじけた。
壊れて、砕けて、爆発した。
視界がぐにゃりと歪んで、とめどなく何かがからだの内側からあふれだしてきた。黒ずくめの男たちがしきりに何かを口にしていたが、わたしには何も聞こえなかった。まるで超大型の台風のような、すさまじいまでの何かがわたしの中で荒れ狂っていた。
大好きだったお父さん、優しかったお父さん。いつもわたしの味方だったお父さん。
お父さんの笑顔が、永遠に続くかと思われるほど何回も、繰り返しわたしの目の裏に、スライド写真のように映し出された。
気がついたとき、わたしはソファーの上に寝かされていた。
「やっぱり見せない方がよかったかな」
男のひとたちの会話がぼそぼそと聞こえてくる。
はっきりと覚えているのは、そこまでだった。
この後のわたしの記憶は途切れ途切れになっていて、まるでテレビのチャンネルを頻繁に変えたときのように、飛び飛びになっている。何度も耳にしたのは、
「ご親戚は？」
という言葉だった。わたしは首を横に振ることしかできなかった。
お父さんが勤めていた会社の方でも、親族の連絡先は知らなかったらしい。後になってから知ったことだけど、お父さんは結婚する

ときに親族と大喧嘩をしてしまい、親戚一同から絶縁されていたようなのだ。
お母さんはすでに亡く、ただひとりの家族であったお父さんが自殺してしまったいま、わたしはひとりきりだった。ときおり、中学校の担任の男の先生が、困ったような顔で付き添ってくれているだけだった。
お父さんのお葬式のこととか、お墓のこととか、そんなことを聞かれても、わたしには分からなかった。まして、お父さんが管理していたお金のことなんて何も知らなかった。
ゾウワイとか、オウリョウとか、そんなものは、わたしは理解できなかった。
カタクソウサクと一方的に言われて、自宅は乱暴なひとたちによって踏み荒らされた。
「お父さんは、そんな悪いことはしていません」
そうつぶやいて、わたしはただうつむくことしかできなかった。
大家さんは、「今すぐにでも出ていってほしい」と、言った。
わたしが首を振ると、「さすがに犯罪者の娘は恥知らずだ」と、怒鳴られた。
どうしたらいいのか分からなかった。
大家さんだけではなく、マスコミだと名乗る人たちも、家にやってきた。電話や玄関のベルが鳴り続けて、わたしはおふとんの中でずっと震えていた。
お父さんの遺品をかたづけようとしても、思い出すのが怖くてさわれなかった。
わたしは、家の外へと逃げた。明日のことはもちろん、今日のことすら考えることができないままに、わたしは公園のブランコに、ひとり座り込んでいた。
とにかく、わたしはお父さんに会いたかった。
泣きそうになって、何度もそれを我慢した。
『わたしは泣かない』

それは、お母さんが死んだときに、お父さんと約束したことだった。
お父さんが死んでしまった今となっては、約束だけでも守らなければならなかった。
こぼれそうになる涙と戦い続けるうちに、あたりは暗くなり始めていた。どうすることもできないままに、わたしが顔をあげたときのこと。
音もなく、一台の真っ赤な車が公園の入り口に止まった。
大きくて、すごく高そうな車だった。スーツ姿に制帽をかぶり、丸メガネをかけた若い女性が、運転席から降りてくると、後部座席のドアをうやうやしく開けた。
そのときのことを、わたしは今でもはっきりと覚えている。
運転手の女性が差し出した手に、みずからの白い手を重ねた人物が、ゆっくりと落ち着いた動作で大地に降り立った。
舞い降りた、といった方が正しかったかもしれない。
車から現れたのは、ひとりの女のひと。
流れるような美しい長い髪。すらりとした長身。抜けるように白いその肌。一流の彫刻家がつくりあげたかのような、完璧な顔立ち。左目に、なぜか白い眼帯をつけていたが、それすらも神々しい装飾品にしか見えなかった。
わたしの目は、吸い寄せられるようにその女のひとに釘付けになった。

わたしは、天使に会った。

その女のひとの背中に、白い羽が生えていないのがとても不思議だった。
その天使さまがわたしの方へと、ゆっくりと近づいてくる。
心臓が、ばくばくと高鳴るのがわかった。呆然と、いや陶然として眺めるだけのわたしの前で、天使さまが足を止めた。レースの手

袋に包まれた手が、わたしに差し出される。
「さあ、いらっしゃい」
言われるがまま、わたしは、うやうやしく天使さまの手をとった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9657z/

BHT　～隻眼の天使～

2011年12月30日01時47分発行